

[さっぽろしK-446いせきしゅつどのいぶつ]

札幌市K-446遺跡出土の遺物

本州との交流

昭和53(1978)年、北区^{あさぶ}麻生町7丁目にある市営麻生球場の建設にあたり、発掘調査をした^{さつもん}擦文文化の竪穴住居跡から出土した遺物群である。擦文文化とは、7～13世紀に北海道を中心とする地域で営まれた文化である。本遺跡の出土資料は、8～10世紀頃の生活の様子や、本州との交流の状態を知るうえで貴重な資料であるとして指定された。

多くの擦文土器

発掘調査では、11軒の竪穴住居跡が発見され、カマドの位置や大きさなどから5つのグループに分けることができた。そのうちカマド^{※1}が北壁に造られた2軒の住居跡からは、多くの擦文土器とともに須恵器^{※2}、土製紡錘車^{※3}、土製支脚^{※4}が出土し、土器12個(うち須恵器1個)、土製紡錘車2個、土製支脚3個が指定された。

旧琴似川

現在の札幌の中心地は、豊平川によって形成された札幌扇状地に広がっている。かつて、扇状地の伏流水は、現在の道庁、北大植物園、知事公館辺りで湧き水となり、北大構内や桑園駅から麻生球場の付近を流れる川となって、伏籠川へと合流していた。

これらの河川群は「旧琴似川」と呼ばれ、市街化によってそのほとんどは失われてしまったが、北大構内の一部などに今も痕跡を残している。

擦文文化の竪穴住居群

旧琴似川流域には、明治時代中頃まではまだ完全に埋まりきらない約720軒ほどの竪穴住居跡の窪みが麻生附近まで確認することができ、詳細な分布図(36ページ)が作成されている。現在の発掘調査の状況によれば、この分布図に示される地点以外



でも竪穴住居跡が発見されることから、擦文時代の約700年間の間におおよそ1,000軒くらいの竪穴住居が作られたと考えられる。

当時の人々は、旧琴似川に遡上するサケ・マス漁、狩猟、採集と、扇状地の肥えた土壌を活用した原初的な農耕による生活を送っていた。

註(用語解説)

※1 カマド：竪穴住居の壁に粘土や石を使用し造りつけられる煮炊き用の施設。煙を住居の外に排出する煙道がつけられる。

※2 須恵器：古墳時代に朝鮮半島から伝わった製作技術による土器で、縄文土器と異なり^{のびりかま}登窯を使用して焼く。窯の中の温度を高めた後に、空気の流入を少なくし、不完全燃焼をさせ(還元焼)1,200度くらい的高温で焼成するため青灰色となる。道内では、登窯跡が発見されていないため、本州から製品を移入したと考えられる。

※3 土製紡錘車：繊維に撚りをかけるためのはずみ車。

※4 土製支脚：土器を使用し煮炊きをする時に、土器を支えるためカマドの中に置き使用する道具。

● 遺物の年代：擦文時代(約1300～800年前)

● 指定年月日：昭和55(1980)年8月12日

● 所在地：札幌市中央区南22条西13丁目1-1
札幌市埋蔵文化財センター

● お問い合わせ：札幌市埋蔵文化財センター ☎ 512-5430

● 観覧形態：常設展示はしておりません

● 観覧時間：8時45分～17時15分

● 休館日：祝日、振替休日、年末年始(12月29日～1月3日)
(ただし、5月3日～5日、11月3日は開館)

● 観覧料：無料

● アクセス：市電「中央図書館前」
じょうてつバス「南21条西11丁目」

